

Title	南[懷]仁の坤輿圖説と坤輿外記に就いて：特に江戸時代の世界地理學史上に於ける
Author(s)	鮎澤, 信太郎
Citation	地球 (1937), 27(6): 426-433
Issue Date	1937-06-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/185171">http://hdl.handle.net/2433/185171</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 南懷仁の坤輿圖說と坤輿外記に就いて

——特に江戸時代の世界地理學史上に於ける——

鮎澤 信太郎

### 一、はしがき

さきに筆者は「南懷仁が支那に紹介した世界地理書に就いて」(地球二四の五・六)なる小論を草したが、其後、南氏の「坤輿圖說」及「坤輿外記」に關する別の資料を見たので、前稿をこゝに補つて置きたい。

### 二、坤輿圖說と坤輿外記

前稿を記す時には未だ筆者は「坤輿圖說」なる書を見てゐなかつたが、其後になつて、陸軍士官學校教授秋岡武次郎氏が支那から購入された稀觀本を同先生の御好意により一覽することが出来た。

此の書の内容は「四庫全書總目提要」の解説に「是書上卷、自坤輿至人物、分十五條、皆言地之所生。下卷載海外諸國道里山川民風物產、分爲五大洲、而終之以西洋七奇圖說」(卷七十一、史部二十七)云々とある如くで、上下二卷となり、アンリ・コルディエの書目 (Henri Cordier, *Bibliographie des ouvrages publiés en Chine par le Européens au XVII<sup>e</sup> et au XVIII<sup>e</sup> siècle* [(1901, Paris)]) に注意された如く、艾儒略 (Aleni, Jules) の撰文が載せられてゐる。此れは勿論、艾儒略が此の書刊行の時、既に此の世の人ではないのであるから、生前に書いたものを、

南氏が収載したものであらう。然し、此の書に此の一文が載せられたことを以て、コルディエの云ふ如く南懷仁と艾儒略の共著とするのは錯覺であることは前稿にも述べた通りである。

此書刊行の時に就いては、徐宗德氏の「明末清初灌輸西學之偉人」(一六頁)やP.L. Pfister氏の「Notices biographiques et bibliographiques sur les Jésuites de l'ancien mission de Chine」I (1932) 等に據れば、其の初版は一六七二年に刊行されたものとなつてゐるが、秋岡先生所藏本には「康熙甲寅、極西南懷仁立法」とあるから、此の書は第二回目の刻本であらうか。

秋岡先生所藏の「坤輿圖說」の詳細は同先生の御紹介を乞ふこととして、こゝでは江戸時代の世界知識發達史上の此の書を見たいと思ふので、内閣文庫所藏の「坤輿圖說」一冊に就いてやゝ詳しく述べて置かう。

内閣文庫の目録には此の「坤輿圖說」の著者の名は載せられてゐない。それは原本に著者の

何物なるかを知るべき記載を缺いてゐるからである。勿論、内容を南氏の「坤輿全圖」や「坤輿外記」と比較すれば、此れが南懷仁のものであることは容易に想像される所であるが、猶、仔細に書中を検すると「地圖第五圖說」の條に「仁等從遠西至中夏、歷九萬里而遙縱心流覽」云々とあるから、内閣文庫目録に在る、此の著者名不載の一本は、南懷仁著と銘打つて差支はないと思ふ。

此書の卷頭には「大學藏書」「淺草文庫」卷末には「昌平坂學問所」「文化己巳」の朱印があるので、凡そ其の來歴を知り得るであらう。右の朱印によつて、此れが文化己巳六年(一八〇九)以前に我國に傳寫されてゐることは明かである次に、内容の大概を知るべく煩をいとはず、目次を舉げて置かう。

#### 坤輿圖說

#### 總序

中國與外國在坤輿圖內布列之理  
地體之圖

地圖第一圖說

地圖第二圖說	地圖第三圖說
地圖第四圖說	地圖第五圖說
亞細亞州	印度亞
百兒西亞	韃而韃
則意蘭	蘇門答喇
瓜哇	渤泥
呂宋	木路各
日本	阿爾母斯
地中海諸島	歐邏巴州
以西把尼亞	拂郎察
意大利亞	熱爾瑪尼亞
拂蘭地亞	波羅泥亞
翁加理亞	大泥亞諸國
厄勒祭亞	莫斯哥未亞
地中海諸島	西北海諸島
利未亞州	厄日多
馬繼可	弗撒
亞非利加	奴米第亞
亞昆心域	莫訥木大彼亞
西爾得	工鄂
井巴	福島
聖多默島	意勒納島
聖老楞佐島	亞墨利加州

南亞墨利加 白露  
伯西爾 智加  
金加西嶺 北亞墨利加  
墨是可 花地  
新拂郎察 五革了  
農地 鷄未臘  
新亞泥俺 加里伏爾泥亞  
西北諸壁方 亞墨利加諸島  
黑瓦頓泥加

斯の如き目次を持ち、其の記事は「總序」の初に

坤輿圖說者乃論全地相聯貫合之大端也。如地形地震山丘海潮海動江河人物風俗各方生產、皆同學西士利瑪竇艾儒略高一志熊三拔諸子、通曉大地經緯理者、昔經詳論其書如空際格致職方外紀表度說等已行世久矣。今撮其簡略多加後賢之新論以發明先賢所未發天地之眞理。

とある如く、利瑪竇の「坤輿萬國全圖」や艾儒略の「職方外紀」の<sup>(2)</sup>記事を其のまゝ採つた所も少くない。然し、此の内閣文庫本は秋岡氏所藏の同書と異り、省略された所が多い。終りに

附された「七奇圖説」も始めに在るべき、地震、山岳、海潮、海動、江河、人物等の通論的記事の多くを缺く。乃ち此書は南氏「坤輿圖説」の完本でなく、抄寫本である。如何なる經緯を辿つて、斯る形になつて傳寫されたか未だ不明である。

フィステル氏は前掲書目に於いて、南氏の「坤輿圖説」を「坤輿全圖」の説明書と見て、從來「坤輿全圖」初版（一六七四）として知られるものと別々に而も説明書の方が二年前に出るの是不自然であると云ふ見地から「坤輿全圖」も現在見られる、一六七四年刊のものより以前に出来てゐるのではないかを疑はれてゐる。<sup>(3)</sup>或はさう云ふことも必ずしも無いとは云へないが、今、筆者はいづれも原本又は初版本に據るのでないから、斷定するわけには行かないが、内閣文庫所藏の「坤輿圖説」の文章と東京文理科大学圖書館所藏の「坤輿全圖」（京城・一八六〇刊）の其れとを比較對照して見ると「坤輿全圖」の中

に註記された説明の方が餘程省略されてゐる。そして、別々に出されても、左程不自然ではない體裁のものであるから、「坤輿圖説」が西洋の原圖から先に譯出されて、其れから、此の書の記事を後に「坤輿全圖」の中へ取捨宜敷く、記入したと見ても無理ではなからうと考へる。

次に前稿にもふれた所ではあるが「坤輿圖説」と「坤輿外記」との關係に就いて再考したい。「坤輿外記」は「四庫全書總目提要」の解説に従へば「案懷仁坤輿外記、別有全本、已著於錄、此本摘錄其文、併刪其圖説」（卷七十八、史三十四）云々とあり、又、ワイリーやフィステルの書目の解説にはいづれも、「坤輿圖説」の主なる地理的記事を省略して、奇異な話だけを摘出したものとなつてゐる。現に我々の見得るものはいづれも刊行の年が不明で、序も跋もなく、書物の體裁としては不出來のものである。内容も「坤輿圖説」と終始一致するのではなく、一例を示せば次の如き相異がある。

外記、七奇の條「七、羅法海島高台」

圖說、「七法羅海島高臺厄日多國、多祿茂王建造。崇隆無際、高臺基址、起自丘山、以細白石築成。頂上多置火炬、夜照海般、以便認識港涯、發泊」。

そこで、筆者は此書の成立、刊行に就いて、或は原著者南懷仁は全然、關知しないのではないかを疑ふものである。防閑の好事家がひそかに「坤輿圖說」によつて、作つたのがこの「坤輿外記」ではなからうか。

### 三、江戸時代の諸書に見えた二書

「坤輿圖說」が完全な形ではないが、夙に我國に傳入して、江戸時代の世界地理知識發達史上に幾分の影響あることは前稿に於いても述べた所である。然し、此のことに關し、新村出博士が「續南蠻廣記」に「殊に采覽異言正徳三年序は南懷仁 Ferdinand Verbeist 白耳義人の坤輿圖說明刻本中略一の所説とに據つたもので」(二二二頁)云々と述べられ又村松繁樹氏も同氏の著「日本地理學史」岩波講座・地理學・六一頁)に「元來白石は元・明の史書に通じてゐたに加へ、先きの南懷

仁(Ferdinand Verbeist)の坤輿圖說を通じて北歐系文化の和蘭人より資料を得た上に、また此の南歐系文明の資料を採つたことは彼の世界知識を甚だ豊富にした。」と述べられ、新井白石が既に此の書を見て「采覽異言」を著はしたとされるが、此の兩先生の説は誤りであらうと思ふ。

白石が「采覽異言」を著すに參考した書物に、なる程「坤輿圖說」と云ふのがあつて「采覽異言」卷第一の劈頭に「凡譯文係明人所刻坤輿圖說。後皆倣此。」などと記してゐるが、次にこの「坤輿圖說」を説明して「圖說明人所刻萬國坤輿圖說也後凡言圖說亦皆倣此。」と云ひ、以下「圖說云」として引用した文は完全に利瑪竇の「坤輿萬國全圖」(一六〇二)の圖說に一致する。新村博士は右に擧げる如く「坤輿圖說」明人所刻とある所から、南懷仁の「坤輿圖說」を明刻本とされてゐるが、南氏の來支は清朝になつてからであるから、此れは餘程不思議な誤りである。其他にも筆者の管見を以てしては白石が「采覽異言」を著すに「坤輿圖說」

其他南懷仁の著した地理書を參考した證據を見出すことが出来ない。筆者の狭い範圍の調査では享和二年に著はされた山村昌永の「増譯采覽異言」卷之六に「南懷仁坤輿圖說云」として引用された一文が、今の所最も夙いものであるが其後では先に述べた如く、文化年間には抄寫本が出来て居り、大槻玄澤も其の著「磬水漫草」の中に「利氏坤輿圖說。及艾儒略南懷仁等。所譯定之諸篇」。(磬水存響、坤一〇二頁)に就いて記す所があり、こゝに南氏の「坤輿圖說」が含まれてゐるかどうか、俄に斷ずることは出来ないが、とにかく此の書の傳入は否めない。

猶「坤輿圖說」卷末に載せられた「西洋七奇圖說」は康熙二十三年に張潮の編した「虞初新志」卷十九に摘録されてゐることを前稿に記したのであつたが、此の「虞初新志」は其のまゝ又我國に傳り、文政六年六月には荒井廉平なる者が訓點をつけて出版してゐる。従つて、南懷仁の「坤輿圖說」の一部「西洋七奇圖說」は我

南懷仁の坤輿圖說と坤輿外記に就いて

國にて翻刻され、其後は、此れが非常に人の好奇心を惹いたものであらう。獨立の一本の如き姿をなして諸所に轉寫されるに至つた。森島中良の「萬國新話」卷末にも「巨銅人」の一節が附録されてゐる。現に、内閣文庫、宮城縣立圖書館等に所藏されてゐる「七奇圖說」の寫本はいづれも「虞初新志」から出たものではなからうか。宮城縣立圖書館所藏の同書は「丙申秋日書於長崎旅館」と云ふ奥書ある藤塚鄰氏の藏本を明治四十三年に至つて再寫したものであるが、興味あることには「坤輿外記」の後につけられたもので、元は後に見る平澤元愷の「瓊浦偶筆」(卷一・一〇頁)にも出て来る和蘭通事、松元綱句讀のものである。内閣文庫本には「瓊浦松世綱訓點」とあつたと記憶するが、世は元の誤りであらう。

次に「坤輿外記」も徳川時代、我國に入つたことは前稿に於いて、嘉永五年に篠田元順の序をつけて、江戸の清溪が譯解した「坤輿外記釋

解「二卷があること、嘉永七年の「改正海外諸島圖説」後集に其の一節が引用されてゐることを擧げて其の證據としたが、其後、新村出博士の編纂になる「紅毛南蠻史料」(第二輯)を見ると、此等より以前に平澤元愷が「坤輿外記」全文を擧げて、その「瓊浦偶筆」卷之五となしてゐることを知つた。

新村博士は此の書の解説に於いて「卷五は南懷仁 F. Verbeest の坤輿外記の抄録に平澤氏の異聞を附註したものである。」(南蠻紅毛史料第二輯卷六・一四頁)と述べられてゐるが、此れは抄録ではなく「坤輿外記」の全部を載せたものである。而して、平澤氏の異聞と云ふのは其の殆ど全部が艾儒略の「職方外紀」の記事を適當に取捨して附註したものであることは兩書を比較して確かめ得た所であるから、右の二點に就き新村博士の解説に一言づゝ加除するの光榮を與へられたい。

猶「瓊浦偶筆」(卷之一)には上に見た松元綱

の編した書物を引用してゐる所もあり、又卷之五の始めに「坤輿外記一本。載在說鈴。多記外國奇事。其說與他書所言。或同異有詳略。今就譯士質問。其異聞並錄」とあり、此の譯士の一人に松村君紀が擧げられてゐるから、仙臺、藤塚鄰氏所藏の長崎で寫された「七奇圖説」の附いた松元綱句讀、「坤輿外記」と平澤元愷の此書(「瓊浦偶筆」卷之五)は或は同一の原本から出た姉妹本かも知れない。

#### 四、結語

以上、前的小論「南懷仁の支那に紹介した世界地理書に就いて」を書く時に未だ見得なかつた資料を得て、補遺をなした。殊に新村博士の「紅毛南蠻史料」は誠に注意すべきものであつたのに、前稿に未だ記し得なかつた筆者の管見を恥じて止まない次第である。

いづれにしても幕末まで、此等の漢譯世界地理書が一部の人々に利用され、世界知識普及に與り、啓蒙的使命を果したことを知ることは、



單なる好事家の興味からではなく、歴史的に注意を要することである。 —一九三七・二・三一

① 拙稿「利瑪竇の世界地圖に就いて」(地球二六ノ四)参照

② 拙稿「文備略の職方外紀に就いて」(地球二三ノ五)及「江戸時代の世界地理學史上に於ける職方外紀に就いて」(地球二四ノ二)参照

③ 時義圖説 Explication de la carte précédente, 2 vol., Pékin, 1672. Cette édition, qui est la seconde, est précédée d'une préface tirée d'un ouvrage du P. Aleri. La date de 1672 semblerait indiquer que la mappe-monde (cidessus, No 14) a été gravée une première fois avant 1674. (Le P. Louis Pfister, Notice Biographiques et Bibliographiques sur les Jésuites de L'ancienne mission de Chine. 1652—1773, I, P. 355)

④ An abstract of Verbiest's work (坤輿圖說) has been frequently published, under the title 坤輿外紀, in

which the principal part of the geographical matter is omitted, and everything of a strange and marvellous character retained. (A. Wylie, Notes on Chinese Literature. 1922, P. 58.9)

坤輿外紀, Abrégé de l'ouvrage précédent (坤輿圖説), dans lequel l'auteur a supprimé presque toutes les notions géographiques, pour conserver les légendes merveilleuses sur les animaux et les pays, 1 vol. (P. L. Pfister, Notice—1, P. 356)

⑤ 幕末、江戸の小説家清溪の「坤輿外記釋解」(十卷)「十卷」の解に「張山來ガ庚初新志ニ此説圖ヲ出シテ詳ニセリ其マテ「ローレン」ノ巨銅人ハ司馬江漢ノ和蘭通船ニモ圖ヲ出シテ之ヲ辨セリ」(十四ノ一)とある。

⑥ 尤も「瓊浦偶筆」卷之五「女國」に關する頭註に「是女國明朝時爲繼而疆所併既亡也久見文備略記中」(紅毛史料一〇〇頁)なる據る所を示した所が一ヶ所ある。